第１１課　再臨にある希望を生きる

【暗唱聖句】

**「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」コリントの信徒への手紙一15章 58節**

【日曜日・主よ、いつまで】

**「万軍の主よ、いつまでエルサレムとユダの町々を憐れんでくださらないのですか。あなたの怒りは七十年も続いています」ゼカリヤ1：12**

人生の様々な試練の中にあって、「主よいつまでこの苦しみが続くのですか」と問いかけたことのある人は少なくないことでしょう。聖書の中にも、そのような叫びが繰り返し出てきます。苦しみが続くというのは辛いものです。神様を信じている人は、愛の神様がなぜ自分を苦しめるのか、自分は愛されていないのではないかと思い、なお一層辛くなることもしばしばです。因果応報的に、何か罪を犯した罰なのだろうかと考えてしまう人もいるかもしれません。

**「主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのにいつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに「不法」と訴えているのにあなたは助けてくださらない」ハバクク書1章 2節**

神様には、神様のお考えがあるのだと頭では理解していても、実際に苦しみの最中にあると耐えがたいものです。黙示録では、天国において殉教した人たちが「真実で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさらないのですか」（ヨハネの黙示録6章 10節）と叫んでいる姿が描写されています。

**「神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。言っておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」ルカ18：8，9**

イエス様は、神の子たちの苦しみを見て、黙ってほっとかれる方ではありません。すぐにでも助けたいと思っておられるし、実際に速やかに介入してくださることを約束されています。ただ、そのとき地上に信仰を見出すだろうかとも付け加えられました。もし忍耐を要求されるとしたならば、それはわたしたちの信仰の訓練であることを多いのです。すぐに諦めてしまうようでは、信仰とは言えないからです。「主と、いつまでですか」と祈りながらも、信じ続けていく信仰が求められているのです。

【月曜日・ある種の希望】

キリスト教に対する誤解の一つに、現実世界から逃避して来世にばかり目を向けているというものがあります。確かに、この世での生活があまりにも苦しいと、現実から逃避したくなる気持ちもわかりますが、しかしそれは聖書の教えではありません。マタイ24章と25章にかけて、終わりの前兆と終わりの時代に生きるクリスチャンがどのように生きるべきかについてイエス様は教えられましたが、最後の結論は次の言葉に集約されています。

**「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」マタイ25：34～36**

困っている人たちを助けてあげる。これは世界の終わりが近づこうとも、私たちが続けていくべきことです。なぜなら、いつ終わりが来るかは誰にもわからないからです。しかも、イエス様は**「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ25：40）**と、ご自分と関係づけて教えられたのでした。イエス様との関係を最後まで持ち続けるものが救われるのです。

【火曜日・復活の希望】

**「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく…」第一コリント15：12**

パウロはキリストの復活を非常に重要な出来事として位置づけ、クリスチャンの最大の望みである再臨と結びつけました。キリストが死の世界から戻ってこられたのならば、この世を一新するために天からも戻って来られることでしょう。そして、キリストが復活されたように、キリストを信じて眠りについた信仰者も、このとき復活するのです。キリストを信じる信仰とは、キリストが再臨されるとき、キリストが復活されたようにわたしたちも復活することを信じることであり、そこに大きな希望を持つことなのです。

**「最後の敵として、死が滅ぼされます。」第一コリント15：26**

死の恐怖に対して勝利したとき、もはや死は滅び去ったも同然です。初代教会のクリスチャンたちは、この復活信仰によって強められ、恐ろしい迫害の中を生き抜くことができたのでした。

【水曜日・裁きの希望】

**「この地上には空しいことが起こる。善人でありながら悪人の業の報いを受ける者があり、悪人でありながら善人の業の報いを受ける者がある。これまた空しいと、わたしは言う」コヘレトの言葉8章 14節**

この世界には、不条理なことが満ちています。納得のいかないことが、クリスチャンの上にも起きてきます。その理由がわかれば少しは納得もできるかもしれませんが、多くの場合なぜこんなことが許されるのかがわからないということが少なくないのです。しかし、空しく叫んですべてが終わるのではないのです。

**「すべてに耳を傾けて得た結論。「神を畏れ、その戒めを守れ。」これこそ、人間のすべて。神は、善をも悪をも一切の業を、隠れたこともすべて裁きの座に引き出されるであろう」コヘレトの言葉 12章13、14節**

最後に神様の裁きがきます。この世でどれほど成功したとしても、それが良い神の裁きを引き出すわけではありません。この世のことはこの世で終わりです。だから、わたしたちは目を上にあげ、天を見つめてすべてのことを考えることが大切なのです。それゆえ、結論として「神を畏れ、その戒めを守れ」と聖書は教えているのです。

【木曜日・もはや涙も労苦もない】

**「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである」黙示録21：4，5**

天国には、この世でわたしたちを悲しませ、苦しませてきたものが一切ありません。これほど希望に満ちた約束はありません。しかも、神様が自ら目の涙をことごとくぬぐい取ってくださるとあり、神様のわたしたち一人ひとりに対する優しさに溢れています。罪に汚れたこの世界には、あまりにも多くの悲しみや苦しみがあります。多くの人が傷つき、病に苦しんでいる人も大勢います。

**「川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があって、年に十二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す」黙示録22：2**

中央の両岸にある命の木の葉は、病を癒すとあります。しかし、新天新地にはもはや病はありません。だから、この御言葉の中にも、神様が涙をぬぐい取ってくださるとの言葉と同様に、神様の優しさが込められているのかもしれません。本当に地上ではつらかっただろうと、憐み深い神様のわたしたちに対する愛が、この命の木には反映されているのです。